小池辰雄著作集　第３巻『無の神学』

第二部　無の神学への道

第九章　即身即主

（１９６６年秋、北摂高原の北摂青少年センターにおける講筵の録音筆写に基いて）

# 【目次】

●福音は神の力　　●信仰は単なる対象的把握ではない　　●神の霊的人格たるイエス　　●信即行　　●救済への決定的な事実　　●ダマスコ途上のパウロ　　●この一事　　●十字架のあがないとみ霊による新生　　●無為の為　　●霊的信仰　　●土の器の中の宝　　●「血潮したたる主のみかしら」　　●信仰の現実　　●愛の現実　●終末的現在　●神話的表現　　●多次元的神秘性　　●観念的信仰と霊的信仰　　●洗礼のヨハネと聖霊のパウロ　●パウロの按手　　●「神の国は力に在り」　●みたまの力　●極限的なキリストの言　　●キリストの本願　●質的完全性　　●いのち賭けのいのり　　●霊的生命の秘訣　　●原始核　　●水となり、火となる　　●福音的満願

# ●福音は神の力

私は今のキリスト教界において信仰の事態が概して知的に傾きすぎているのをなげかわしく思っています。

「ギリシャ人には愚か」

とパウロが言ったように、ギリシャ人的な知的な角度からキリスト教に対している場合が多いわけです。歴史的に申してもヨーロッパにおけるキリスト教が宿命的にもっている一面がそこにあったわけです。ところが福音を端的に受けとる角度は全人的であって、これは「神の力」（第一コリント1･18､24）として信受されるわけです。それで私たちは大胆に卒直に信じ入る聖書本来の信仰の復活をなしとげてゆかねばならぬ使命を感ずる者であります。

# ●実存哲学と聖書

日本人はどうも流行が好きで、今や哲学といえばサルトルを読まねばはなせぬという状況であるようです。サルトルは申すまでもなく実存哲学者の一方の親玉。しかし実存的思惟の元祖は実は聖書にあるのです。旧約のヨブ記や伝道の書をよんでごらんなさい。

現代の実存哲学というならば、ハイデッガー、ヤスパース、マルセル、サルトルといった四人。これらをよむというなら、じっくり取っ組んだらいいでしょう。サルトルはマルセルと反対な立場にあること、あたかもニーチェがキエルケゴールと反対な実存哲学者であるようなものです。何をよむにしても聖書の光をもっていなければ、本当のよみ方ができません。ヨーロッパの思想は何らかの意味でキリスト教と関わりがあるからです。

# ●信仰は単なる対象的把握ではない

ところで信仰を求める人たちも、神を観念的対象にしているか、神話的対象にしているか、が多いようです。ある意味で対象的につかむこともいいのですが、そういった角度で有神論的に信じてみても本当の信の世界からは離れています。そうかと思うと一方では自然科学的な角度から、物理的な角度から対象的に考えて、神なしなどと結論してみても、それは次元のちがった事態を自分の範疇で判断しているのであって、見当ちがいというものです。

こちらから対象的に「神あり」と言おうが、「神なし」と宣しようが、それで、神のことがらはどうにもならないです。

空気は「ある」だとか、「ない」だとか言って一所懸命に見ても空気は見えませんが、「ない」と断じ得るにもいきません。空気は目の観察や理解ではよくわからない。しかし空気は我々が呼吸しているという体験的事実を通して「ある」ということがハッキリ言えるわけです。我々は空気によって生かしめられているから、空気は有る、存在すると告白できます。観察でも、思考でもなく、生きることと不可離の体験に即して「空気はある」と告白できるのです。

# ●イエスにおいて神を見る

現にそこにおいて生かされている。こういうのが一番実存的な判断です。信仰の事態もそのような体験の角度が大切なのです。皆さんが誰かキリスト教を求めている人に

「キリスト教の神とはどういうのですか？」

と聞かれたら、端的に

「イエスをごらんなさい！」

とハッキリ言えなければダメです。このイエスという人に福音書でぶつかりなさい。それであなたがこの人に驚嘆してその前に本当に降参するなら、降参した時に「神在り」という声を発するでしょう。イエスに降参しない限り、「神在り」などと言ってもそれは福音的な本ものとはいえません。

# ●神の霊的人格たるイエス

イエスという人物において我々は測り知ることのできない神に出合ったわけです。「出会い」という言はよくキリスト教界でつかいますが、未だいいかげんです。キリストに本当に出会ったら、平伏し、たおれ、降参することになるはずです。それが本当の出会いです。その典型的な例はパウロです。ですから出会いは、体あたり的なものです。ぶったおれ、降参するたちのものが本当です。イエスを研究する人は、ただ歴史的乃至神学的にイエスをとやかくと言っているまでです。それによってイエスの外貌は見えてくるでしょう。構造はわかってくるでしょう。しかし、それでは霊的なイエスは見えません。血の通った生命あふれるイエスの本質はその霊的生命にあるからです。私はそれを霊的人格と申します。これが受肉のイエスなのです。

私もこの霊的人格イエスにぶつかって、完全に降参した一人です。キリストにつかまえられました。この事実は誰が何といっても否み得ない事実です。そしてこのキリストにおいて、キリストを通して神を見ました。

# ●「直ちに」

さて信仰とはどんなことでしょう。使徒たちは、たとえばマルコ福音書のはじめの方をお開きになって下さい。１章16節をよみましょうか。

「イエス、ガリラヤの湖に沿いて歩みゆき、シモンとその兄弟アンデレとが海に網投げうちおるを見給う。彼らはなり。イエス、言い給う『われに従いきたれ』」

とあります。

「われに従いきたれ」

なんていきなり命令することのできるこの権威ある人！　霊的な力がなければ、こんな権威はでて来ません。

「汝らをして人をる者とならしめん」

「彼ら直ちに網をすてて従えり」

とあります。何と簡単な卒直な事態でしょう。この「直ちに」（euthus）「ユートス」の中に信仰の奥義があるといってよいのです。そこには「なぜでしょうか」とか。「いや私はそれでもこういうわけです」とか、いう疑問や弁解がましいことは何もありません。もうキリストの言下に圧倒され、信頼してしまうのです。

「わが言は霊なり、なり」

というキリストの権威ある力ある言葉、それは人を圧倒しながら、人をどん底から支え、力を与える力なのです。

# ●信即行

聖書は創世記から黙示録に至るまで、神の力ある行為と、権威ある言で満ちています。「元始に行為ありき」とファウストをしてヨハネ伝題１章１節を訳させているゲーテは、観念信仰、形式宗教に対してプロテストした角度があったわけで、ゲーテはたしかに信仰の気合をわきまえていた人です。信仰とは実にこのように全身的投入なのです。だからいわゆる行為ではなく、最も内的なそして全身的な投入、即ち内的全身的行為が信で、私がつねづね信行と申すのもそのわけで、信仰と行為を二段がまえに考えているうちは、最も本質的な把握からはずれるわけです。信即行なるがゆえに、「信仰のみ」といえるわけなのです。その点プロテスタントもカトリックも真に聖書的な事態からずれている場合が多いと私は思います。信仰のいわゆる行為面がずれてくるところに、信にも拘らず行がだめだという人間の罪性があるのですが、だからといって行をそれ自体問題視するのは根を問わないで枝葉を問題にすると同然で、それでは問題の真の解決にはいたらず、力にも生命にもまことの行為にも至らないわけです。私はだから信行一貫一如にこそ聖書的信の本質ありと申すのです。

# ●「行為は言葉の基である」

べルナール・ド・クレールボー（Bernard de Clairvoux, 1091～1153）という神秘家の祖といわれる人が、

「行為は言葉の基である」

と言っているのです。驚くべきでしょう。ミスティカー（神秘家）というと何かただ冥想ばかりしているように、とかく一面的に考えがちですが、人間というものを概念や観念や主義でわりきってはいけません。人間なんていうものは、わり切れるものではありません。現実や本質を謙虚に認識して判断すべきです。私はこの秋、このベルナールの言葉に接して、べルナールの実存に敬服いたしました。

「行いは言葉の土台である」

と。どしんとした宣言ではありませんか。いわゆるプロテスタントの人々が神秘家をすぐ警戒しますが、実は神秘家の中には、深い福音的な者もあるので、見そこなっては大変です。むしろプロテスタントの観念性に自らプロテストすべきであります。ベルナールのその「行為」はどこから来ているかといえば、キリストへの沈潜から来ているのです。彼は福音的ヨハネ的神秘家といったらいいでしょう。彼は雅歌書を愛読し、キリストとの深い霊交をそこから学びとりました。み霊の愛の迫力を賜っていた彼が愛の実践力のあったのは自然でありました。ベルナールが第二回十字軍を起こした有名な演説もラテン語でしたが、これを解しないドイツ人ですら、彼を通してはたらくみ霊の迫力に感動して悔改の涙に咽び、十字軍への従軍を志願する者たちが少なくなかった由です。

# ●救済への決定的な事実

キリストに無条件降伏して、「ハイ！」といって自我という我城（牙城）を明け渡すことがなかなか出来ないのが罪というものです。使徒たちですら、一応は出来たものの本当に決定的に出来るには、ある一つの事態を絶対に必要としたのです。そのことは、イエスはちゃんと知っておられたのです。だから彼は捕えられる前にペテロに、おまえは鶏の鳴く前に三度私を否むぞ、と言いなさった。キリストを否むことは、自分を肯定することです。「ハイ」の反対です。神・キリストに「然り！」ということは、おのれに対して「否！」ということなのです。信仰とはそういう本質をもったものです。その決定的事態とは、キリストが十字架による贖罪の大業を果すということでした。言うまでもなく、イエスはこの大業を決定的に完了されました。この事態が単なる歴史的事実であるなら、おとぎばなしと同じですが、この事実はナポレオンがヨーロッパを席捲したという事実よりもはるかに偉大な事実で、歴史の終末にいたるまで、人間を救済する力をもった事実であります。ところで、我々がこの救済を受けるか受けぬか、信受するか否かは、我々の自由であります。いくら我々が自由な存在に創造されていても、救済絶対という恩恵の事実があって、その道が開かれていなければ、我々の自由なんていうものはみじめなものです。否、実に我々の自由そのものが罪に毒せられていてなかなかこの決定的な恩恵の事実、十字架の贖罪を信受しようとしないのが人間の現実ではありませんか。

# ●聖霊のバプテスマ

さて、贖罪の十字架を受けとっても、本当に復活の霊体のキリストの血をのみ、肉を食わねば、我々に永遠の生命はありません。然らばその聖餐的なあずかりは何をもってなされるのですか。聖霊のバプテスマの他の何ものでもありません。祈りの現実で聖霊のバプテスマをうけて、み霊が内住した人になれば、そのときはじめて、祈りの世界でキリストの生命にあずかることが自由自在となります。悔改の水のバプテスマの内実は、キリストの十字架による贖罪を信受することによってみたされ、聖餐の内実は、聖霊のバプテスマを祈りの中に体受することによってみたされます。私は別に洗礼、聖餐を式としては営なみませんが、それが一般に形式であるからといって、無視する気はありません。深山幽谷にいったら希望者には洗礼をほどこすかも知れません。曠野のオアシスの如きところを見出だしたら聖餐にあずかるかも知れません。十字架のキリスト、復活、聖霊の主を、祈りにおいて信受することだけが信仰の決定的内実であります。これなくして何の信仰ですか。それは観念にすぎません。パウロが

「み霊を宿さざる者はキリスト者に非ず」（ロマ8･9）

と喝破したのは永遠の真理です。

# ●ダマスコ途上のパウロ

そのパウロさんは、御承知の如く、はじめはイエスを新興宗教家、異端者と見なして、イエスを信ずる者を迫害していたわけでした。この頑強なパリサイ・ユダヤ教徒の急先鋒サウロを、復活霊体のキリストはダマスコ途上で電撃的に霊光を以て打ち伏せ、聖霊のバプテスマを浴びせかけ、全身を霊縛し、やがてアナニヤを通して按手のもとに、たましいの開眼をさせました。

「わが眼よりうろこの如きもの落ちたり」

とはサウロ＝パウロのいつわらざる告白！　ここに彼のたましいに決定的なことが起きたのです。このような聖霊のバプテスマを、──それはどんな現象をもってしてもいいです、人によっていろいろですから。──とにかく一度び決定的に受けることが不可欠です。それは知らぬ間にということもありましょう。しかし、あきらかに聖霊のバプテスマを受けたことを全身を以て告白できなければダメです。とにかく祈りを怠ってはいけません。仏教の世界でも満願ということがあるでしょう。親鸞聖人も満願の日に、法然に出会う仏のめぐみにあずかりました。

# ●決断の空しさ

よく信仰は決心、決断による、といったことをプロテスタントがいいます。しかし決断（エントシャイドゥング）などいうものは、一時的なものでダメです。勿論悪いとはいいませんが、私自身三日坊主を度々経験してもう経験ずみというものです。自分自身に愛想をつかせていますからね。その代り、みたまの力とそのありがたさは誰が何といっても否定することは出来ません。

# ●この一事

パウロばかりでなく、ペテロもヨハネもヤコブも、要するに使徒たちは皆、聖霊のバプテスマを受けて本ものになりました。地上のイエスと同じ釡の飯を食べていても、それでどうにかなるものでなかったのです。何年一諸にくらしたからどうのこうのではないです。何年集会に通ったからどうのこうのでもないのです。聖霊のバプテスマを本当に受けたか。たましいの根底が本当にそれで砕かれたか。キリストの愛が何より慕わしく、この主の愛の力で一切をつつむたましいとなったかどうかです。要するにみたまのバプテスマを本当にうけたか。この一事のみです！　それでいよいよ十字架の贖罪が限りなく深いめぐみとして受けとられているかどうかであります。

# ●聖霊体験

そういうわけで、本当のキリストヘの降参は祈りの中で決定的に聖霊のバプテスマを受けたときです。これがキリスト自らが言われた

「人新たに（上より）生れずば神の国に入ること能わず」

の新生なのです。聖霊は心霊的なこととはちがいます。キリストの霊ですから、私たちのたましいの中核となって下さる。聖霊が一粒のの如く中核となって下さるのです。聖霊体験とは断じて何か心霊的な主観的な判断ではありません。このキリスト主体の体験を皆さんがいつか祈りの場を通してなさったら、これで確かに今までとは違った新しい次元にきたということが自分ではっきり告白できることになるのです。

# ●十字架のあがないとみ霊による新生

私は何も霊的な現象を手ばなしで問題にしているのではない。根源現象（Urphänomenon）あるいは根源現実（Urwirklichkeit）においてハッキリそういうところへ来たことを体験させられると、何らかその人その時にふさわしい現象が伴うものです。使徒たち、ペテロ、ヨハネ、ヤコブ、パウロといった人々は、福音の事態を告白するのに、個性によってさまざまです。必ずしも十字架ということすらも共通ではないのです。その点では何といってもパウロも明確に十字架をうちだしています。正に十字架の神学を打ちたてたといってもさしつかえないほどです。表現はどうであれ、罪のあがないということにおいては皆共通しています。「あがない」という宗教的観念は旧新約聖書に於て一貫しています。それゆえ新約の福音において「あがない」といえば十字架による贖罪を意味するのは当然で、十字架という語が少なかろうがそれで内容が変るわけではありません。ところで「みたま」とか「聖霊」となると使徒行伝が圧倒的に多いです。これにほぼ近いのはパウロの手紙です。ともあれ、「十字架のあがない」と「みたまによる新生」は絶対に切りはなし得ない福音的救済の消息であります。

# ●パウロとヨハネ

ヨハネという人をみていると、彼はパウロのような劇的な転回、回心をしないでも、スウーッと知らぬまに、み霊の世界に入っていて、彼においてはみ霊のバプテスマは春雨の大地にしみ入るが如きわけであったのでしょう。聖霊の浸透の深い人であったと思われます。楽に受けて深く入ってゆくたちの人であったのでしょう。だから性格的にはヨハネはイエスに近く、イエスに特愛されたこともうなずけます。ヨハネ伝第21章20節に「イエスの愛したまいし弟子」とか「み胸に寄りかかりし弟子」とあるように。

これに反してパウロは「」が強いもんだから、十字架でひっくり返されなければ仕様がない。だから彼は十字架、十字架とくりかえし力強く告白しないではいられなかったわけです。

一方またヨハネの手紙を見れば、罪のことはヨハネも強く語っています。「あがない」の絶対必要なことは明白です。パウロがかの有名なロマ書第７章で語っている通りです。ヨハネとパウロとは体験の性質はちがうけれども、結局事態は同じことです。

# ●無為の為

ところでイエスはとっぷり神のふところに入ることのできた唯一人の人でした。彼は全然自我、我執がない人でしたから。即ち罪なき人でしたから。我執がなく自我のない人は、いわば神我（こんな言は今始めて造ったのですが）がハッキリしていた人だといえるわけです。神格的な我れの人、人にして神、神人といえる唯一者であったのです。これを神的人格といってもいいでしょう。神なしには生きられなかったキリストであればこそ

「われ自らは何ごとをもなし能わず」（ヨハネ5･30）

と告白し給うたのです。それはいわゆる謙遜などいうのとはちがいます。自分がない、無私的、無的実存者であった何よりの証言です。無為の為、即ち神にあって一切を為し得た人でした。

# ●無即無限

ところで

「衆生ことごとく仏性あり」

といわれるように、

「我らは皆神の子」

であります。ただ残念ながらこの神性が魔性に毒せられて実力を失っているまでです。仏教では仏の性を自覚することが悟りで、その他は迷いとなります。我らにおいては神と直結できないが故に罪びとというのです。そのことを告白している典型的な例がロマ書第７章というわけです。肉の弱きを知っておられたキリストはむしろ無力に徹して神一切となったところに自我からの真の脱却があったわけです。

イエスは単に神話的に神人だなどというのではありません。神性の実質を、無私の実存を以て実証したわけです。いつも申すごとく無即無限がそこにあるのです。イエスにおいてはこの即は手ばなしですが、我々においてはこの「即」が即ちあがないによる絶対恩寵を意味するわけです。あがないを媒介として我々に罪からの解放が与えられ、無私的無が与えられるから、この無私的な無において主の無限がはたらき給うことが無即無限を以てあらわされるわけなのです。

# ●霊的信仰

換言するならキリストの十字架のゆえに、我々のたましいは全開の事態を受けて主の中に突入するのです。そこにレリギオ（再結合）が成就します。その再結合の現実は既に聖霊を賜った現実です。でなければ

「我れキリストの中に」

など申してもそれは思いこみにすぎません。突入はだから祈り心でなければ出来ないのです。祈りの場においてのみ聖霊ははたらき、与えられるのです。このようにして得たみ霊の内住の現実が使徒的信仰の現実なのです。これを霊的信仰と申してよいのです。聖言が真に化体受肉されている現実です。キリストの神性が内住しているわけで神性に即してくるわけです。即神を手ばなして成し遂げられたイエスは、み霊にみちあふれた人でしたから、神の現象体です。キリストを見るまでは神は見えない、キリストを見たら神を見たのだ、とさきほども申したわけなのです。だから我々は神のドラマたる福音書でキリストに本当に体あたりして祈り心でキリストを全的に信受するだけのことなのです。これが神への最短距離です。

# ●「我らを見よ！」

その言葉、その行為、その実存、その十字架、その復活、その聖霊という全キリストの事態は、絶対にユニークなもの（無比）です。ペテロは何といったでしょう。使徒行伝第４章をひらいて下さい。そこに乞食がいます。生れつきの脚なえで、いざって何か物欲しげに手を出している。ペテロは

「われらを見よ！」

といいました。ペテロはあわれんで財布から金を投げてやるかと思えばそうではなかった。

「金銀はわれになし。わがうちにあるものを汝に与う。ナザレのイエス・キリストの名によりて歩め！」

と叫びました。そして右手をとって起こしたら、足なえは起ちあがって即座に歩み始めました。即ちペテロの中には、みたまの主が来て力を与えている。だからペテロは権威を以て「われらを見よ！」と言った。その「われら」はペテロ、ヨハネそのものではない、

「我らの中のみたまなる主を見よ」

ということです。

# ●土の器の中の宝

人間ペテロは一個の罪びと、パウロにしても同じこと。パウロは

「われは罪びとの」

とまで言いました。

「ペテロ何者ぞ、アポロ何者ぞ、パウロ何者ぞ、ただ主キリストだけだ」

とはパウロの告白でした。

「この土の器の中にある宝──みたまの主──を如何にせん！　これれて大いなる力の我らより出でずして神より出づることのあらわれんためなり」（第二コリント4･7）

とパウロは叫んでいます。このような使徒的信仰の現実と同質な現実を身につけないで何の聖書研究ですか、何の信仰ですか。

十字架に裏づけられたみ霊の現実。使徒たちは聖霊を何よりの歓喜と力の源泉としていました。だから彼らの手紙をみても、聖霊、み霊という言が山彦のようにこだまかえして反復されています。

皆さん！　十字架という門を通って──私は門がまえの中に十の字を書いて新しい「門（門の中に十）」という字を書きたくなるのです──聖霊の光の充満している世界に突入して下さい。今日みたいに天空清澄で陽光を全身に浴びていると、祈り心地で聖霊に浸透されることをうながされる思いです。み霊に浸る祈りの世界は楽しいものです。

# ●即身即主

みたまに在ってキリストに「即」する世界、それは外側から有神の無神のということと凡そ次元も範疇もちがうのです。即神の世界に入らぬ限り、有神、無神、多神、すべてナンセンスと申してもさしつかえないと思います。結局、即身即主の世界に突入しなければダメです。みたまにあって即主の世界に入ったら、それこそ「言うことなし」です。ペテロの「我らを見よ！」も即身即主の現実です。

「われ生く、されど我にあらず、キリストわが内に生くるなり」（ガラテヤ2･20）

というパウロの告白も正に、即身即主の現実です。福音的神秘の世界です。このような即主の世界が聖霊内住の事態なのです。そこでは聖霊が「身」と「主」にとって共通項であるわけですから、「即身」の「即」は即ち

「十字架を経たるみたま」

を意味しているわけです。決して数学的な「イコール」を「即」が意味しているのではありません。

# ●「血潮したたる主のみかしら」

絶対無条件のみたま内住の恩寵を一般のキリスト者はなぜ欲しないのでしょう。

「我をい、我を飲め！」

とキリストは言いなさったが、みたまを宿さざる限り、キリストの言は空転するばかりです。昔の神秘家といわれる人々をむげに警戒して、実は彼らの中に、今のキリスト者よりも福音的に深い現実があったことをみのがしている場合が少なくないと思われます。彼らの霊的実存は整った神学論をこねまわす学者よりも尊く、レッテル正当信者よりも本ものであります。あの

“O, Haupt voll Blut und Wunden! ”「血潮したたる主のみかしら」

という有名なゲルハルトの讃美歌も実はベルナールのラテン語の讃美歌“Salve Caput Cruentatum ” が源泉で、これを改作したものなのです。神秘家の祖ベルナールも十字架の贖罪愛に深く浸っているわけです。カトリックだから、プロテスタントだから、無教会だから、幕屋だから、といった所属を以て人を品さだめするようなことはよろしくありません。仏教徒であろうと、無宗教者であろうと、人間そのものを全的に見て、その人の最善のもの、最も本質的なものを見て、それが凡そまことであるなら、尊びたいと思っています。みたまの愛の目はそういう目です。ベルナールさんは慕わしいたましいです。深い愛の人です。キリストに浸った人です。

# ●ベルナール

さきほどから申している即身即主の現実！　私が今日皆さんに本当に申したかったのは、この即身即主の境地なんです。さきほどの説き証しでもおわかりの如く、それはどこまでも十字架に裏づけられたみたまの現実で、既に聖者となった境地だなどと申しているのでは毛頭ないです。聖者に列せられたベルナールも自分のことを絶対に聖者などとは思っていませんでした。この「不徳な者」と彼は謙遜でもなんでもなく本当にそう思っていました。自分を何ものとも思わない淡々たる虚空の如き境地が仏教でいう「悟り」であります。しかし福音においては「悟り」ではなく、ものすごい積極的な内実がこもるのです。その内実が「主」ですから、即身即主ははるかに驚くべき霊的現実で、使徒的信仰の根源相であります。

# ●信仰の現実

ヘブル書にある通り二千年前に贖罪の大業を果し、旧約の贖罪の祭儀を不要としてしまい、旧約宗教を完全にみたしたイエス・キリストの十字架・復活の事実こそ、わが人生の成否に関する決定的な事実として受けるか否かが、信仰のわかれ目であります。相対的歴史的事象としてのキリストの十字架ととる人はそれまでのこと。あれを終末的事実、即ち歴史の終末に大いなる関わりをもつ事実として受け、且つ現実の我れにとって生死にかかわる事実として生ま生ましく受ける人は、キリストと偕に罪の我に死し、義の我に甦って永遠の生命の人となる。これが信仰の現実であります。そのような現実化のはたらきにはみ霊のはたらきが絶対に必要。それがみ霊のバプテスマなのです。復活昇天されている天界のキリストから送られるみ霊が来り臨んで自由自在にはたらき給う信仰が、真に現実的であるためにはみ霊の内住が本ものでなければなりません。

# ●希望の現実

希望の世界は未来から現在に向って迫ってくる。

「わが希望は神より出づ」（詩62･5）

とあるように、希望は神の本願であるからです。我らの願望ではないのです。そして希望がまた現在面をつよくもって現実的でなければ、希望は空望的となります。たとえば、

「聖国を来らせたまえ」

との祈りは未来的希望ではありますが、聖国が現実にわが胸の中になければ、この祈りは空念仏となります。み国は事実、聖霊をいただいていると、わが胸の中にあります。

「天国は汝らのうちにあり」

との聖言が語っているように。希望の確証が現在していますから、希望の祈りに力が入り、必ずその成就のときが歴史的終末において来ると信じ得るのです。

# ●愛の現実

「希望は恥を来らせず、我らにりたる聖霊によりて神の愛、われらの心に注げばなり」（ロマ5･5）

とあるように、聖霊が要するに、信仰をも希望をも現在化させる内実であります。聖霊の現実はいうまでもなく愛の現実で、愛ほど現実感のつよいものはないです。ロマ書８章の終りの数節の如きが端的にそれを示しています。

# ●終末的現在

それで信・望・愛は、渾然として一つとなって、過去・現在・未来を、終末的現在において掌握するのです。それが神の国の現実化の事態です。即極楽（浄土）をいうのも同様の消息を語ることばです。み霊を宿していると天国の中核がそこにあるからなのです。それゆえ、信望愛は不可離の三相一貫をもって終末論的現在を把握せしめ、真の時間的構造がそこにあるわけで、こういう在り方のみがまことの永遠をもつというものです。永遠は単に時間の無限といったことでは観念にすぎませんが、現在という時限的につかむことはできないが、その現在を現実たらしめるものは霊的生命のほかになく、そこに永遠が質的にとらえられるわけであります。

# ●神話的表現

また空間的な面を考えてみると、これも相対的自然科学的空間を媒介としながらも、その中にそれを貫いて、絶対空間というもの、霊的空間というものが遍在していることを体感せしめるものが、やはり霊的生命であります。キリストの復活体的生命の呼吸している空間であります。これが天国というものです。それは音波の空間に電波の空間があるようなものでしょう。キリストは

「父なる神の右にいます」

といっても、これはあきらかに神話的表現で、霊界には右も左もないでしょう。けれども具体的な五感の我らに対しては霊界もそのような表現であらわされるより仕方かないわけです。事実そのように黙示の世界で顕示されたから、聖書にそう記されてあるわけです。ブルトマンの「脱神話」ということも、偶像的なものの混入を否定せんとのこころから発したものでしょう。真理性そのものを尊重せんがための主張でしょう。しかし、神話的表現そのものが直ちに偶像化ではなく、かえって真理の具体性を表現せんとする大切な要素をもっているわけです。聖書は創世記から黙示録に至るまで、大胆に神話的表現を自由に用いています。それを読む心がなければダメです。キリストに

「見る目ある者は見るべし、読む心ある者は読むべし、聞く耳ある者は聞くべし」

と言われるでしょう。神話的表現において真理の内実を洞察霊視すればよいのです。

# ●霊的空間

空間的に言うならば、神、キリスト、そしてこの二者が私たちの中にみたまをもって入って下さる。そこに四位一体（神・キリスト・聖霊・我）が垂直関係をもって成り立ち、それが愛の当然の動きとして隣人への展開となるとき、愛の環流によって円現的様相となります。隣人は複数において社会性をもったものですから、私がいつも書く幕屋（天幕）構造となるわけです。これが天国的霊的空間を構成するわけで、みたまのはたらかない空間構造は天国とはいえません。人間社会の中に、愛の御霊が自由にはたらけばそこが天国です。その天国の雛形として「幕屋」とか「教会」（召されたる者の集り）があるわけなのですから、幕屋や教会は聖霊を宿す者たちの集りそのものであるわけです。教会の存在的使命、本質は正にみたまの宿るところ、キリストの霊愛のはたらくところというわけです。そこから放射能的はたらきが、社会に流れ、社会を構成している人間のこころの中に、天国的に作用し、天的に変質させてゆくことが教会の使命であります。職制的教会の構造を問題とすることは、第二義的なことで、──何となれば人間のいとなみの中には、その形態が何であろうと、いわゆる「無教会」であろうと、皆相対的不完全性が伴いますから──我々がつねに自他ともに念とすべきことは、そこに真にみたまが宿り、その実践に努め、つねに自己を突破しつつ不断の展開をしているか否かです。信仰という語の内実はそれだけ重厚なものでなければならないと思います。

# ●多次元的神秘性

キリストの愛のみ霊の貫流し環流するところ、そこに霊的空間があり、霊的磁場が生じます。それは平和のみならず歓喜の世界であり、

「汝らは世の光なり」

の現実となり、み霊の光、遍照するところの球体の如くでしょう。満天の星の光をみるとき、私はそこに宇宙的な霊光のつらなりを霊想します。

「神は万物に超在し、万物を貫きて在り、また万物に内在する」

とパウロが喝破した通りです。そこに汎神論的なものがあろうと、そんなことは問題でありません。霊的空間に遍在し給う神・キリスト・聖霊の三位一体自由自在な神の在り方、多次元的神秘性を体感したら、豊かなる神の聖名をたたえるよりほかなき次第です。

# ●使徒的信仰の実存構造

質的な構造、質的な実存構造から言いますと、十字架のキリストの砕け、贖罪の死だけだったら、彼自身が死であります。そんな不合理はあり得ません。彼の霊生へのよみがえりは至当至極なこと、もしそうでなかったら神の存在の否定と宇宙の霊的道徳的秩序の崩壊です。十字架の贖罪も全く空しくなります。私たちは罪から解放されても、空巣のたましいでは、サタンが占領する。そこにキリストの霊が来り宿らないでどうして救贖であり得るでしょう。そこで、十字架の死、墓の突破、復活の顕現、昇天とキリストは大勝利をなさった。キリストの義は勝った。愛は勝利した。み霊の力がその実力であったのです。かくてキリストは御約束通り、聖霊を降し、我らに与えたまいました。そこにキリスト道の、キリスト教の歴史は始まったのです。

十字架の砕け、復活の突破、聖霊の包摂がキリストの絶対恩恵のきってもきれない事態です。一切をい、一切を遍照し、一切を包摂したもうみたまの主！　その主とみたまで一体となる即身即主の事態、そこに質的実存構造があるのです。以上のような時間的、空間的、質的な構造をもっているものが使徒的信仰の実存構造というものです。

# ●観念的信仰と霊的信仰

さて観念的信仰と霊的信仰のあざやかなコントラストが実は使徒行伝に示されているので、それをよく認識して現代キリスト教界の通弊にならわぬようにしていただきたいと思うのです。それはパウロの第三次伝道のところで、行伝の18章24節からです。

# ●ロゴス的なアポロ

「時にアレキサンドリヤ生れのユダヤ人にて聖書に通達したるアポロという能弁なる者エペソに下る」

というところからです。アポロは旧約聖書に通じている聖書学者というわけです。今の神学者や聖書註解者と思ったらいいでしょう。非常に能弁であるし、聖書に通暁しているロゴス的な人間というわけです。ヨハネの侮改のバプテスマだけしか知らないのに大胆にもイエスのことをことこまかに説教していました。彼はイエスのメシヤ（キリスト）たることを示して激しく且つ公然とユダヤ人を説き伏せていました。だからなかなか有能な人ではあったです。けれどもそれは今の一般の神学者や説教家と同じことであったわけです。現代の神学者、伝道者にはアポロ的な方々が沢山おられるでしよう。それは実は惜しいことです。

# ●洗礼のヨハネと聖霊のパウロ

さて次に何と書いてあるでしょう。

「かくてアポロ、コリントに居りし時、パウロ東の地方を経てエペソに到り、ある弟子たちに逢いて、『汝ら信者となりしとき聖霊を受けしか』と言いたれば、彼らいう『否、われらは聖霊の有ることすら聞かず』」（行伝19･1～2）

パウロはそこで、

「そんならお前たちは何によってバプテスマを受けたか」

と聞きました。すると彼らは、

「ヨハネのバプテスマです」

と答えました。パウロは、

「ヨハネは悔改めのバプテスマを授けて、おのれに後れて来る者（即ちイエス）を信ずべきことを民に告げたのだ」

と言いました。

# ●パウロの按手

そこで彼らは驚いてパウロにねがい、主イエスの名によってバプテスマを受けました。パウロにとっては

「主の名による」

ことは、事実、イエスの霊的実力によることでした。ペテロもヨハネも皆正にそうでした。ですから、パウロが彼らの上に按手をすると、み名をよんで、みたまの力を受けたパウロを通して聖霊が彼らの上に臨みました。するとそのときの聖霊の賜（カリスマ）として彼らは異言を語り、且つ預言もしました。その人々が十二人ほどあったと書いてあります。

# ●アポロとパウロ

アポロとパウロの信仰の質の相違が以上の事実でハッキリとわかるのです。神につき、キリストに関して知的に詳しいアポロの信仰が別にわるいわけでも、まちがっているわけでもありませんが、肝腎なものを欠いていたのです。それは聖霊の現実であったのです。福音「について」立派に語る神学者も牧師も多い、しかしそれはアポロ的であります。これに反して、神・キリスト「の中から」、み霊の現実において語る伝道者は少ない。これがパウロ的、使徒的というものです。「の中から」の告白的な証言が本ものの世界です。「について」語る人々は研究的、観察的な正確さはあっても、ことの本質と中核に触れていません。「の中から」ものを言う人の言には権威があり、たましいをゆり動かす迫力、生命力をもっています。イエスが正にそれであったから、

「彼は学者らのようではなく、権威ある者らしく教えた」（マタイ7･29）

とある通りです。使徒たちの言がやはりこれと同質であったのです。パウロの伝道には、これもイエスの線に沿って、

「尋常ならぬ霊能の業」

が聖言の伝達と共に自由に行われ、聖名の栄光がいたるところであらわれました。だからパウロはローマ教会でも、

「霊の賜物」（ロマ1･11）

を分与しようと願っていたのです。

# ●「神の国は力に在り」

また第一コリント4･24に

「神の国は言葉にあらずして、力にあればなり」

とある通り、いかに観念的信仰がいましめられているかがわかります。神の言は

「霊なり生命なり」

であるから、実は聖言自身がみたまの人が語ると力をもっています。気のきいた解説や、厳密な註解ではなく、からの告白、祈りに発した解明こそ力があるのです。このような事態から見ると、現代キリスト教界には一般的に大欠陥があります。みたまの力の欠如であります。

# ●みたまの力

み霊はあるときは言葉として、ある時は知恵として、ある時は、本当に何か外的な力として。これらはすべて霊的な力なのです。みたまのわざは何であろうと、そこにエネルゲイアがあり、デュナミスがあるのです。本ものはみな霊的迫力をもっています。

「われらは真理のためには力あり」（第二コリント13･8）

と。

「われは真理なり」

とはキリストの言であるが、真理は力をもっています。道理も力をもっています。聖霊を受けると、全存在そのものに力がこもって来ます。およそ創造的な力がでてくるのです。冷たいものに熱を加える、邪しまなものを正しく直す。陽光の如く、万象を変質変貌させてゆく力をもっているというわけです。その点でもイエスのみはケタちがいの力をもっていました。例えば彼が湖上を渡ることが出来たのも、自然法則を支配する霊法を心得ておられたからです。全く神の力にあずかっていたからです。聖意の動くところ、そこに力が生ずるのです。それゆえ、死人を甦らせるような驚くべき生命力をもっておられたのです。

# ●極限的なキリストの言

キリストの言も水が割られていません。みんな激しい言です。いい加減な言で、人間どもがどうにかなるものではないのです。キリストは、そういう極限的な力ある言で私たちを圧倒しながら、彼の中に投身する人を救いあげて、力を与えなさるのです。これは体験してみなければわかりません。

# ●信仰の無上命令

たとえば、

「おのが十字架を負いて我に従え」

というキリストの言を誰が手ばなしに受け得るでしょう。十字架を負うとは、おのれを棄てることを意味する。これは生れつきの我々のなし能うところではない。しかしキリストはそれを要求しておられる。それは、キリストが我々のために自ら十字架を負う人であったから命じ給うた。

「自分では負えぬ十字架を私が負わせてやる。私は十字架を突破してよみがえる力をもっている人間である、だから自分では負えない十字架を私は一緒に負ってやる、負うことの出来る聖霊の力を与える」

という聖意なのです。それは同時に主が聖霊のバプテスマを授け給うから、俄然力が湧く。このようにしてこの句も楽しき力を与える句となるのです。そのとき

「わが荷は軽し」

とのみ言の真義がわかってきます。

「即身即主の世界に突入せよ！」

が信仰の無上命令といってよいでしょう。かくてキリストの実存にあずかる。そこにキリストの本願があるのです。

# ●キリストの本願

キリストとみたまを以て交って、キリストのふところに突入して、キリストと我とは一つなりとなる現実を信交と申したい。そのようにして即身即主となること自体がキリストの本願の劫力、即ち、みかまの力による。主が

「私はおまえと一つだ」

といって下さるから、こちらは平れ伏して

「ハイ！」

といって突入する。これほど簡単なことはないです。幼児が母の胸に抱かれることが自然である如く、わが霊はわが全存在は主のみ霊の翼の蔭に入ります。私は波状的にこの一つの消息を皆さんに語って来ました。もうこの消息が体で受けとめられて来たと思います。あとはただそのような祈りの現実につね日頃突入してそれを信仰の現実とするばかりです。

# ●質的完全性

みたまは完全性をもち給うから、私たちのたましいの中に完全性が結実するのです。それは量的なはなしではなく質的完全性というものです。

# ●祈りとはキリストを体受すること

みたまを受けるのに最も大切なのは祈りです。祈りのないところに霊的生命は絶対にありません。ベルナールも言いました、

「行いと言と祈りとは離すことはできないが、祈りは最大なものである。言葉をもって神の道を伝えよ、行いをもって神の道を証しせよ。しかしその原動力は祈りである」

とベルナールも言っています。祈りは力です。しかし祈りが力であるとは、祈りを通して来る神に力があることです。祈りとは、キリストを体受することです。何かおねがいすることは祈りの枝葉です。祈りの極致はキリストを体受することです。みたまの主を宿すことです。そうでなくて枝葉の願いを熱心にやっていると知らぬ間に御利益信仰に堕してしまうでしょう。しかしもし一つの願いがきかれたら、同時にキリストを受けとって、いよいよ主を畏れ親しむようになることです。宗教の世界は、一所懸命に祈れば聴かれることが多い。諸々の宗教がそれをやります。福音における祈りは、聞かれた祈りを契機に、また聴かれない祈りを契機に、いずれにせよ、聖名にあって祈るのですから、イエス・キリストを受けることが主眼です。主を受け、即身即主となってゆけば、本願に聴き入ることとなり、祈りを深くあつくやりながら願いを越えてゆく。悲願を超えて本願をよろこぶたましいとなる。それが最高の平安になってゆくのです。主の力がうちに満ちてくるから、

「われを見よ！」

と。ペテロのように主の権威でものが言えるようになるのです。そうなると祈りは楽に展開してゆきます。

# ●いのち賭けのいのり

またそうなると

「主様！」

「お父様！」

の一言に無量の内実が盛られてくるのです。それは

「南無阿弥陀仏」

「南無妙法蓮華経」

に無量の救いがかかっているのと同じです。日本の第一級の僧はやはり皆、そういう単純な境地を体得していました。このような一言の唱名唱法に信仰の極致、極限を盛ったわけです。ところが、キリスト教は何だかむずかしいことにしてしまったようです。「主の祈り」は大切ですが、これが空念仏に大方は化してしまっているようです。

「主イエス・キリストよ！」

に全生命を賭けるような祈りをすれば、みたまは即ち来りたもうのです。いついかなるところでも絶対にゆきづまりを知らぬことになります。この祈りさえ本ものになれば。祈りにていさいは禁物。祈りは裸身の取っ組みです。ロダンは大胆にも十字架のキリストの脚もとにマグダラのマリヤが裸身でしがみついている影刻をつくりました。さすがにロダンです。このような態勢が本当の祈りであります。

# ●祈りの合唱

どうぞ祈って下さい。といっても大ていの集会でなかなか祈らない。祈りを何だと思っているのでしょう。祈りはたましいの愛の助け合いでもあるわけです。他の人の祈りをきいて、その心となって、共に祈る祈り心となって助け合ってゆくところにみたまの磁場が生ずるわけです。丁度合唱のようになって霊界をゆりうごかすわけです。祈りの姿勢はあるときは合掌して、あるときは首を垂れ、あるときは首をげて、あるときは眼すらも見開いて、霊界のみ声の波動を受ける心地で祈ることが大切です。神様はそのような祈りの合唱をよろこんで受けて下さる。讃美歌の合唱も、本当に讃美の心をこめてうたうならば、それが祈りの合唱でもあるのです。あのヘンデルの「メシヤ」の「ハレルヤ合唱」の如きは祈り心でうたうのでなかったら、ナンセンスであります。祈りは神、キリストと霊の親しみに入るのですから楽しいものです。

「主よ、キリストよ、アーメン、ハレルヤ！」

で完璧な祈りです。問題はいつわりなき実感を以て祈っているか否かのみです。夜、眠りにつくとき、床の上に端坐して、かんたんに、しかし腸の底からみ名を唱えれば、直ちに主のみふところに憩い、力を得て翌朝は起きあがり、感謝と讃美の心をもって一日のスタートを切るわけであります。夜眠れないなどいうのは信交衰弱というわけです。

# ●霊的生命の秘訣

なやみもくるしみも何かあらん、ゆきづまりを知らぬ人になります。単純、卒直な祈りを大胆にやりなさい。主の本願がかかって来ます。

祈り心はいつどこででも！　これが霊的生命の秘訣であります。八方やぶれの構えならざる構えのように、どんな咄嗟なときにも、はたと祈り心で主に即しまつる態勢ができてきたら本ものであります。満員電車の中であろうと、どこであろうと、眼を閉じれば、これ深山という秘訣が祈りの世界で得られるわけです。さて今晩は夜をこめて仕事をしようとこころざし、しばらく瞑目して祈れば、不思識にめざまされて仕事ができるというものです。そういうわけですから、皆さん、屈托のない人になって下さい。八方破れの開けっ放しのたましいにならないとこの楽しさはわかりませんよ。

# ●静動自在

それで無教会主義も結構ですが、また教会の在り方もそれぞれでしょうが、主義にこだわったり、会堂意識にたてこもったりしたら、どちらにしたって、イエスの自由さ、使徒たちの素朴さからはズレを来たしてしまうわけです。我々はつねに自分を破り、自己突破をして前進してやまぬ動的な在り方でなければダメです。といっても人間はつねに動いてなどいられません。動中静あり、静中動ありという境地が本当の生命的信仰態であります。教会なら形あって無形なり、無教会なら無形にして体ありというものです。そういう形態を私としては「幕屋」を以て表現しているわけなのです。それを無教会からも、教会からも誤解、曲解されたのでは、ただ天を仰いで嘆息するばかり。時がくれば真理はあきらかとなるのですからシャーローム（平安）です。私もパウロさんのように躓きの石的にされてしまったのだから、み名のため光栄におもっています。水をわらぬ福音のためです。

「わが名のため、汝キリスト者といわれる者たちより悪口をいわれ、疎外されるとき、汝は幸である」

と主は言いたもうです。

# ●原始核

人間の集るところ、それは皆相対的なものです。それが三角だって、四角だって、丸だって、星の形だって、どれでもいいです。私の集会は「幕屋」と申しますが、ちっとも主義化しようと思っていません。問題はそこに聖霊という原始核が宿っているか否かだけです。どのような主義、主張、プロテスタント、カトリック、何であろうと、み霊の光がそこに現実にあるなら、第二義以下のことは問うに及ばず、互に他を尊重して本当の大和がそこにおのずから成るというものです。パウロの言う「聖霊の一致」とはこのことです。イエスの

「汝らは世の光なり」

とはこのことです。

「ハイ、そうです。主様、あなたの聖光がわが胸に光を放っております！」

と答えられるわけです。

# ●法然のなやみ

いつかもおはなししたでしょう。法然が何とかして煩悩を去らせようとするけれども、煩悩は形に添う陰影のように、どうしても去らせるわけにゆかないといってなやみました。また心の澄んだ菩提の世界は、ちょうど水に映っている月影のようで、いくらそのような月影をとろうとしても、水がゆれ月影がくずれてしまうように、心が澄みきることができない、といって嘆きました。その解決は「南無阿弥陀仏」の唱名という他力本願に帰して、心安んじたわけでした。

# ●水となり、火となる

けれども福音の世界では、水に映った月影をとる境地があるのです。どうしたらいいんですか。みたまはしばしば水にたとえられます。即ち十字架の恩恵ゆえにみたまを宿して、自分自身が水となるのです。自分が水となったら、どうですか、月影は光もろともに水に宿るではないですか。月を採るも採らぬもありません。何のたくらみもなく月影は宿らざるを得ないのです。即ち聖霊を宿した私たちは菩提の境地に入ったわけです。この罪びとでありながら。私は何も昔の聖者をみません。私自身が、みたまのめぐみで、聖者の境地に入れるからです。聖霊はまた火にたとえられます。この胸三寸の中に聖霊のをともしてごらんなさい。それは

「汝らは世の光なり」

で、この胸からスウーッと光がさしますから、形に添う陰影が「消えてあとぞなき」というわけです。光をそとから受けているだけでは投影される。中から光が放たれれば影は消えてしまう。ローソクに陰影なしです。そのように、煩悩は影を消してしまうです。相対的な私は、現実にかげもあるし、月影もやどりがたき者に相違ありませんが、みたまにある私は、それにも拘らず、既に陰影なく、月影が宿っているのです。これが恵みの現実、信仰の現実というものです。これがさきほどから強調している即主の現実です。恵信一如の事態です。ペテロ、ヨハネ、ヤコブ、パウロ、皆その現実を言を以て告白し、行をもって証していたからこそ

「我を見よ！」

といえたのです。どんなあらしにも消えぬうちなる聖霊の火のありがたさよ！

「心に太陽をもて！」

とは正に福音的大真理であります。みたまのキリストを胸三寸に宿すところに、福音的神秘があります。

# ●福音の証者

以上のようなわけですから、皆さん！　使徒的信仰を慕い求め、ペテロ、ヤコブ、ヨハネ、パウロの真に実存的な信仰を生涯を貫いて生きて下さい。これに優るものはないはずです。これが本道であることは聖書自らが証しているところなのですから。新約聖書をよんで、みたまのこの事態が身につかなかったら、いくら研究をしてみても徒労であります。研究というならば、信仰の霊的神学的解明が、正に使徒的信仰の本質に迫る質をもったものでありたいものです。即身即主の絶対恩寵の現実においていとなまれるあらゆる文化的活動に主の栄光があらわれること瞭かでありますから、どうぞそのような生涯を以て福音の証者となって下さい。それがまことの伝道であります。大量伝道だけが伝道ではなく、専門の伝道者にだけゆだねるのが福音の道では断じてありません。平信徒の生活伝道を以てこそ神の国は建てられてゆきます。

# ●福音的満願

おわりに一言、皆さん、どうぞ一度は、パウロが

「神のためには狂えるなり」

と言ったほどに、左顧右眄はやめて、聖霊のバプテスマを受けるまで、──それが福音的満願です──たましいを打ちこんで祈りなさい。連日連夜、ある時間を限ってつづけてごらんなさい。勿論聖書を身読しつつ。それも特に福音書をよんで、キリストに親しく接しつつ祈るがよいです。今こそ再宗教改革、レ・レフォルマツィオーンを各自がなすべき期です。この自分自身をまず、というのが何よりもの火急の事態です。私自身、いよいよ自己突破をやってゆきます。主の御本願の力によって、その贖罪の十字架で、その復活のみ力で、そのみ霊の浸透にあずかって！

〔この講筵の夜の祈祷会で、集った信友たちは、みたまのバプテスマを著しく受けて、ハレルヤであった。〕